

Explorer Toshio Asaeda : Training in the Period before Participation in the American Expeditions of 1930

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-10-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 丹羽, 典生 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009855

資料 Research Resource

探検家朝枝利男の修業時代

—1930 年のアメリカ探検隊参加までを中心に—

丹 羽 典 生*

Explorer Toshio Asaeda:
Training in the Period before Participation
in the American Expeditions of 1930

Norio Niwa

- | | |
|-------------------------|-------------------------|
| 1 はじめに | 3.1 麻布中学からの退職とシカゴ大学への留学 |
| 1.1 忘れられた朝枝利男 | 3.2 剥製技術の習得と西海岸への移転 |
| 1.2 朝枝利男と Toshio Asaeda | 4 博物学者になるために |
| 2 日本における学生時代 | 4.1 最先端の博物学の技術を求めて |
| 2.1 誕生から初等教育 | 4.2 日米の研究者ネットワーク |
| 2.2 東京高等師範学校への進学 | 5 最後に |
| 3 渡米と博物館界隈での修練 | |

* 国立民族学博物館

Key Words : natural history, history of anthropology, Toshio Asaeda

キーワード : 博物学, 人類学史, 朝枝利男

1 はじめに

1.1 忘れられた朝枝利男

本稿ではいまでは忘れられた探検家朝枝利男の前半生に焦点をあて明らかにする。彼はアメリカの博物館に籍を置き、1930年代の太平洋諸社会を幅広く調査する探検隊に複数参加した。当時最先端の博物学関係の技術（水彩画、標本画、生物の剥製）を習得して、関連する業務に携わった。彼の魚類の水彩画は、生前何度か展覧会が開かれいまでも高く評価されている。また第二次大戦中の日系人収容所での体験をもとに描かれた一連の水彩画は、スミソニアンで日系人収容を主題とする展示が開かれた際には、チラシにも使用されたほどである。しかしその一方で彼の生涯は謎に包まれている。本稿は、こうした朝枝利男の渡米前からアメリカにおいて探検隊に参加する前を彼の修業時代とする。そして朝枝の前半生ともいべきその時期に光を当て、具体的な証拠に基づき明らかにすることを目的とする。あわせて戦前の一学生が公的教育や自学自習を通じて多様な博物学的技術を修業する様を分析しながら、当時の博物学の位置づけについて副次的に光を当てていきたい。

1.2 朝枝利男と Toshio Asaeda

朝枝利男が知られていない人物という前提で稿を起こしたが、まったく知られていないわけではない。2014年に刊行された『事典 日本の科学者—科学技術を築いた5000人』において、彼は、「地質学者」で「日本人として初めてガラパゴス諸島を探検」した人物として立項されている（日外アソシエーツ2014: 15）。この項目の内容の根拠としては、おそらくガラパゴス諸島研究の第一人者である伊藤秀三による以下の文言が背後にある。筆者が知る限り、朝枝利男とガラパゴスの関係について第三者によって書かれた日本語の文章のうちで最初期のものである。

このなかで、一九三二年に行われたカリフォルニア科学アカデミーの二度目の探検には、隊員として、はじめての日本人が参加した。同アカデミーの技師をつとめていた浅枝利雄氏

である。同氏の仕事は、写真撮影、標本のスケッチ、彩色であった。まだカラー・フィルムがなかったころの時代である。海から引き揚げた動物や藻類を、変色しないうちに手早く、正確にスケッチし、彩色する仕事は貴重であった。同氏は、日本人の繊細な手先を買われて参加したのである。国際探検隊出発の直前に、私は浅枝^{ママ}さんにお会いする機会を得た。ご自分で作成されたガラパゴスのスケッチ・ブックや写真を前にした氏のお話によって、私の予備知識が豊富になったことはいうまでもない。(伊藤 1983: 36)¹⁾

朝枝利男本人もいくつか文章を残している。たとえば戦前に、『徒步者の為^{ママ}の趣味の登山』という著作を刊行している(朝枝 1923)。それ以外で筆者が確認できた限りでは、『新青年』『科学画報』そして『東京朝日新聞』『日米』に、カメラマンとして同行した海外調査の経験をいくつか文章にしている(朝枝 1932a; 1932b; 1932c; 1933a; 1933b; 1933c; 1933d; 1935a; 1935b; 1935c; 1935d; 1935e; 1935f; 1936; 1937)。より学術的な論考も、『植物及動物』に寄稿している(朝枝 1938)。もっとも彼がこうした文章を残していること自体は、寡聞にして知られていないともいえる。

戦後には、先に引用したようにカリフォルニア科学アカデミーのガラパゴス探検隊に初めて参加した日本人とし言及されている(伊藤 1983: 36; 201)²⁾。朝日新聞の記者である荒木高伸が、彼の生涯について簡潔にまとめ日曜版の記事にしている(荒木 1988)。筆者が確認できた範囲で朝枝の経歴についてまとめられた最初の日本語の記事かと思われる。実際のところ彼の日本における知名度が上がる機会があった。彼の生涯を題材として、テレビ番組(『ガラパゴスから南太平洋へ——南海に楽園の夢を追った日本人』)が制作されているのである。1990年5月19日14時35分よりフジTV系にて、土曜スペシャルとして上映されたその番組では、ガラパゴスを中心に太平洋各地に探検に乗り出した朝枝の姿が描かれ、妻である朝枝寿々香にもインタビューしている点がとくに貴重である(朝日新聞 1990: 32)³⁾。

こうした日本における状況に比べると海外においての方がまだ、いずれにせよ限られた人々の間でとはいえ、知名度がある。実際、本稿執筆時点においてインターネットの検索サイトで「朝枝利男」で調べてもほとんど情報が得られないのに対して、「asaeda toshio」で検索するとそれなりの情報が手に入る。

実際のところ、彼の絵画作品や写真は世界各地の博物館や市場に散在している。

そしてそれらのうちのいくつかには、絵画や写真の作者として簡潔な情報が付されている⁴⁾。さらに、世界の探検に関する百科事典において言及されてさえいる (Howgego 2006: 177)。このように朝枝の情報は世界各地に広く薄く散在している。その一方で彼がどういった人物なのかは、探検期に関する論考 (cf. 丹羽 2020) を除くとほぼ不明となっている。本稿では、筆者が現時点で集約できた資料を基に、彼がアメリカにわたり探検隊に参加するまでの生涯と事績をまとめていきたい。

2 日本における学生時代

2.1 誕生から初等教育

朝枝利男は 1893 年 (明治 26 年) 12 月 9 日に東京で生まれた (Asaeda 1947)。原籍は山口県で、士族の出である (東京高等師範学校 1917: 336; 1921: 356, 598)。山口県玖珂郡岩国錦見を原籍地として特定されたこともある (日布時事 1936: 10)。朝枝という姓は、たしかに当該地区と歴史的なかわりが深い (上田 1970)。ただし本稿で扱う朝枝利男についていえば、彼の両親の名前も判明しておらず、具体的にどこまで出生地とかわりがあったか分からない。出生地に関していえば、履歴書はもとより渡米後の各種の記録においても、出身地欄を東京と記載しているのが常である。新聞記事にも朝枝の談話として「親たちは東京に移っている」との語句もあり (日布時事 1936: 3)、心情的にはともかくとして原籍地であるという以上のつながりはなかったのかもしれない。

後の彼の姿を偲ばせる自然への関心は小さい時から培われていた。幼少期に母親が亡くなり、彼は父親や兄弟から一人離れて、半年ほど東京の伯父の家で暮らす時期があった。すでにそのころから田舎での自然に囲まれた生活へのあこがれがあった旨、彼としては珍しい自伝的エッセイのなかで触れている (朝枝 1923: 1)。

自然に囲まれた生活という夢が実現したのは、おそらく 1900 年代半ばあたりのことだ。朝枝は、現在の群馬県富岡市一ノ宮に転居している。彼は、群馬県の富岡市を「自分の少年時代八年間の故郷である」 (朝枝 1923: 396) とまで述べている。富岡市では、旧前田藩の藩邸跡地にある群馬県立富岡中学 (現群馬県立富岡

高等学校)にて3、4年学んだことを含めて、妙義山界限の自然に親しみつつ過ごしたという(朝枝 1923: 396)。自然に恵まれた生活は、しかし、父親が他界したことによって中断される。富岡中学の在学4年目に帰京しているのだ(朝枝 1923: 1-2; 396)。中学の修学期間が若干残されていたことになる。別の記録によると、その後、1911年に東京の麻布中学を卒業しているということなので(Department of Justice Division of Records 1941-1942; 東京高等師範学校 1921: 356, 598)、前述の履歴書の中等教育を5年間受けたという記述を考慮すると(Asaeda 1947)、麻布中学には、少なくとも1、2年在学したことになる。あるいは麻布中学には一年生から入りなおしたが、アメリカの博物館に提出した履歴書では煩瑣になるため5年間の就学と略記するにとどめた可能性もある。このあたり当時の学制を念頭において、履歴書やその他資料の断片的な情報から、筆者なりにつつまが合うように整理してきたが、明確なところは判然としない。

ともあれ朝枝は、旧制中学校を卒業後、群馬県の中里尋常高等小学校で教員に就いていたという。明治天皇が崩御し、大正に時代が移り変わった直後の1912年10月から1914年の9月のことだ(Department of Justice Division of Records 1941-1942)⁵⁾。ただし具体的にどのような教員のポジションだったのかは不明である。自身で作成した履歴書には記載がないことから(Asaeda 1947)、正規の雇用でなかったのか、アメリカで提出する履歴として煩瑣と考えたのか。いずれにせよ本人はこの経歴を重視していなかった可能性が高い。

次項で述べるように1916年から東京高等師範学校に入学しているので、中里尋常高等小学校の教員をやめた後の1914年の10月から2年弱のあいだ、朝枝の足取りはわからないことになる。しばらく特定の職に就くことはなく、また何らかの教育機関に在籍もしなかったのであろう。その時期の活動として参考になるのは、朝枝の著作の中にある手書きのスケッチである。それらには、日付が付されており、これらが彼の手によるものであるとすると、彼の足取りを推測することができる。たとえば、1915年4月7日には、伊豆東岸の富戸にてスケッチしている(朝枝 1923: 311)。このように日本各地を旅しつつ自己研鑽を重ねていたと思われる。実際、この頃の朝枝の様子を記す興味深い証言がある。朝枝は、^{やまのうちしげ}山内繁雄(詳細は後述)と神奈川県おの浦賀大津海岸でたまさか遭遇していたのだ。夏のことであったという。1923年に刊行された朝枝の書籍の序文において山内は朝枝

との邂逅を「凡そ十年の昔」としている（山内 1923: 1），1913 年前後ということになる。当時の群馬県中里村は山中の「交通容易ナラス」な場所なので（多野郡教育会 1910: 246），朝枝が同校から退職してからであろうか。休職前であるなら夏休み中のことかもしれない。ともあれ若かりし日の朝枝の姿を伝える数少ない証言であるので，ここで山内の文章を引用しておく。

朝な夕な日中に，海岸の濱づたひの徒歩に，水泳ぎに，船こぎに，敏活に動き，岩石貝殻海藻あつめ，風景の水彩畫・見取り圖の調製に忙はしく，しかも心からこれに興味をもたれ，往きかふ人遊びつどふ人にたづねらるれば，誰彼の好惡の差別をおかず，親しみ話しあふさまは，滞在中いつも少しもかはりがないので，洵によく自然を愛する人との深い印象を與へられた。（山内 1923: 2）

海洋生物への関心，生物標本の収集，水彩画や図の作成など，別稿（丹羽 2020）でふれた探検時代に朝枝が逸材として重用されることになる博物学的技術への関心がすでにこの時代から彼の身に培われていたことがわかる。朝枝は博物学的探究を求めて，おそらく関東圏を中心にひとりめぐり歩いていたのであろう。

2.2 東京高等師範学校への進学

浦賀海岸での出会いもあったのことだろうか，朝枝は山内繁雄のいた東京高等師範学校に進学する。1916 年（大正 5 年）に東京高等師範学校の理科第三部予科（甲）に入り（東京高等師範学校 1916: 338），1917 年（大正 6 年）同校理科第三部本科に入学している。なお 6 人いる同級生のなかには秋葉祐之⁶⁾の名前もみえる（東京高等師範学校 1917: 336）。そして 1920 年（大正 9 年）3 月には，同校の第三部甲組（博物，地理）を卒業した（東京高等師範学校 1921: 356; 598）。

裕福な家庭にうまれたとされる朝枝は（Takahashi 1943: 2），事実，東京高等師範学校時代の学費はすべて私費で賄っている（東京高等師範学校 1916: 338; 1917: 336; 1921: 356, 598）。朝枝の生涯にわたる博物学的なものへの関心と趣味への没入を形成するにあたり，この学校での生活は，多大なる影響を与えたと思われる。彼の写真撮影の経験は，この高等師範学校本科への在学 2 年目にあたる 1917 年から始まる（Asaeda 1932）。さらに特筆すべきは，山内繁雄との師弟関係である。自著刊行に際して序文をもらうことになる山内繁雄は，朝枝の在学時，植物，

生物の教授（東京高等師範学校 1917: 285）、生物学の学科主任（東京高等師範学校 1917: 296）であった。山内は、『博物学教授及研究之準備』（1902 年、東洋社、野原茂六との共著）や『高等青年講座 第2巻 博物』（1931 年、青年教育普及会）という博物学に関する著作も複数書いている。朝枝の関心と重なることは明白である。

同じく朝枝の著作に序文を書く佐藤傳蔵も、やはり同校の鉱物、地質の教授（東京高等師範学校 1917: 283）、鉱物学、地質学の学科主任（東京高等師範学校 1917: 295）であった。また、それぞれ朝枝の属した理科第三部本科の第一学年の学級主任と第二学年の学級主任でもあり密接な関係があったことをうかがわせる。ちなみに朝枝の予科時代の学級主任は、進化論の啓蒙で知られる丘浅次郎であった（東京高等師範学校 1917: 294）。こうした人選から朝枝が吸収した生物学・博物学の時代状況が垣間みえる⁷⁾。

3 渡米と博物館界限での修練

3.1 麻布中学からの退職とシカゴ大学への留学

東京高等師範学校卒業後は、母校であった東京の私立麻生中学校にもどり教鞭をとっている（東京高等師範学校 1921: 356; 598）。1920 年頃⁸⁾ から、地理の講義を担当していた（麻布学園百年史編纂委員会 1995: 1168; 1190–1191）。朝枝は、この時期も博物学的技術の研鑽を怠らなかったようだ。カリフォルニア科学アカデミーには、1921 年の東京で描かれた油絵が残されている。それは水上に浮かぶ船と船乗りを、銀塩キャンバス（bromide canvas）の上にカラーで彩色したものである。おそらく白黒写真の上に、色彩を落としたものではないだろうか⁹⁾。

麻布中学での職は長く続かなかった。1922 年 3 月にはやくも退職している（麻布学園百年史編纂委員会 1995: 1168; 1190–1191）。在任期間はわずか 2 年程度ということになる¹⁰⁾。しかし朝枝は学生に確かな印象を残していた。後に教育用の地理模型を製作することになる西村健二は、麻生中学で教鞭をとっていた朝枝に感化されて、地理の面白さに目覚めたと後年回顧している（宮下 2019: 30）。1920 年 8 月 30 日には伊香保温泉の火災に立ち会い（朝枝 1923: 390）、1921 年の 1 月上旬

に浅間山界限（朝枝 1923: 420 と 421 の間の挟み込み）、7 月に硫黄岳にてスケッチを（朝枝 1923: 455）、1922 年 1 月前半には伊豆にて火山の観察や地形・地質の調査を行っていた（朝枝 1923: 172; 180; 312）¹¹⁾。このような直接かつ多彩な経験に裏打ちされた朝枝の話は、学生の興味を引いたのだろう。

朝枝が麻生中学をかくも短期間で辞した理由は、アメリカ留学のためと思われる。渡米のきっかけとして中学に教員として在職中にシカゴ大学地質学の客員教授から留学を勧められたと後年述べてもいる（Takahashi 1943: 2）。記事のなかでは推薦した教授の氏名までは、記載されていない。また専門は地質学ではなく生物学であるが、シカゴ大学の教員であることやその他の文脈を重ね合わせて考えると、恩師山内繁雄の蓋然性が高い。

ここで山内繁雄について若干紹介しておきたい。先に述べたように彼の渡米の契機となり、朝枝は、アメリカ滞在初期に山内のネットワークにいたと思われるからだ。山内は、山形県生まれの生物学者。東京高等師範学校卒業を経て同校講師として着任。その後、コロンビア大学とシカゴ大学へ留学して学位を修めている（Chihara and West 1998; 千原 1999: 76）。日本でも、1911 年に東京帝国大学より理学博士を取得し（大蔵省印刷局 1911: 157–158）、1910 年から 1927 年まで東京高等師範学校で教鞭をとった（Chihara and West 1998; 千原 1999: 76）。藻類の研究で一家をなし、同時代の日本においては当時最先端の優生学を日本に導入して、大日本優勢会を発足させた人物のひとりである（平田 2002）。そうした生物学史上の経緯からいまでも批判的に検討されることがある（Otsubo 2005; 大坪 2013）。

人類学史とのかかわりから興味深いのは、山内繁雄が属していたネットワークである。彼は東大で学位をえて東京高等師範学校ではたらくという官学のエリート研究者であるが、同時にその枠を超えたネットワークにも入っていた。日本人類学の草創期の学者である坪井正五郎が渡米した際には、山内とシカゴ大学人類学科の教授で日本研究者でもあるフレデリック・スタール¹²⁾と交流していた旨が坪井の日記に記されている（川村 2013: 323–325）。また山内は、三田平凡寺の主宰する「第一次世界大戦後から昭和期戦前ころにかけて存続した収集趣味家たちの交遊会」（斎藤 1997: 91; cf. 山口 2001: 331–332）である我楽多宗のメンバーであった。会員として「第十六番万法山帰一寺」という雅号を与えられた彼の収集ジャンルは、「遺伝学習資料」（斎藤 1997: 91）あるいは「遺傳参考品」であった

(長岡 1935: 145)。そして我楽多宗のネットワークには、先述したスタールもいた。スタールは 1920 年から「第三一番寿多有山趣味梵刹スタール」という雅号の会員となっていたという(斎藤 1997: 91)。スタールはお札博士の別名でも知られ、日本での調査も行っていた人類学者である。これらの機縁があったためであろう、山内はスタールの日本語の著作に解題を寄せている(山内 2007: 322–326; cf. 山口 1995: 547–555)。なお山内は『郷土趣味』という民俗学的営為に連なるような研究活動を行う雑誌を刊行していたネットワークにおいても、スタールと並び特別会員として在籍していた(川村 2017: 43–46)¹³⁾。

シカゴ大学を選択したのは、山内の紹介を通じてこうしたネットワークの近傍にいたからと思われる。実際のところ朝枝が我楽多宗や郷土趣味あるいはそれに類するネットワークに参加していた証拠はいまのところない。しかし著作タイトルに趣味という文言を入れ、「趣味に生きる人にしてはじめて趣味を解し、趣味を解する人ではじめて趣味を説く資格がある。朝枝君はたしかに身自ら趣味に生きる人である」(山内 1923: 2)という山内による朝枝の描写からして、お互い人生における態度について響きあうものを感じていたのかもしれない。

こうして朝枝は日本から離れることとなる。29 歳の時だった。1923 年 3 月 20 日に横浜から天洋丸で出港して、4 月 5 日にアメリカのサンフランシスコに到着している¹⁴⁾。旅路は一等客船に乗船しており、同行者には社会主義者片山潜の娘で当時バレリーナとして有名であった片山安子も乗船していた(日米 1923: 5)。

『徒歩者の為めの趣味の登山』¹⁵⁾は渡米三カ月後には刊行され、朝枝も意気軒高であったろう。1923 年 7 月 3 日の東京朝日新聞紙上には、本書の広告が掲載されている。そこには、「発行草々好評赫々並製特價の五千部既に盡きんといひまや重版中山岳愛好の諸士は此廣告を切抜申込あれば特價の分を提供す買切れざる内に早く――」(東京朝日新聞 1923: 1)と宣伝文句が掲げられている。また『図書月報』には、別の版の広告が記載されている。そこでは、同書にそれぞれ序文を寄稿した高等師範時代の恩師である山内繁雄、佐藤傳藏両氏が「斯界の権威」として並びたてられ、「筆者の抱負」の欄に筆者について紹介した文章がある。当時の朝枝の日本での売り出され方と状況を伝えているので、以下に引用したい。

徹底したる山岳研究家であり登山の愛好家である筆者、内地のあらゆる山岳を盡し今や本

書脱稿を記念に歐米に於ける山岳研究のため長途の渡航を志し今將に遠洋航海中なり、意氣に満ちたる壯年著者の快舉や。(弥吉 1986: 212)

しかし実際のところ朝枝はシカゴ大学での学生生活を楽しむことはなかった。1923 年 9 月 1 日におきた関東大震災は彼の将来の計画を白紙にしたからだ (Asaeda 1932; 1947)。朝枝の没後に書かれた記事によると、留学中の生活費に何冊かの著作の印税を当てにしていたが、関東大震災の結果版元が倒産したため不可能となったという (荒木 1988: 33)。1923 年 4 月にサンフランシスコに到着して関東大震災が同年 9 月であることを考えると、彼がシカゴ大学に在籍したという文言をいくつかの記録のなかで目にする事ができるものの (山内 1923: 2; cf. 朝枝 1933a; 荒木 1988)、本人が履歴書に記載しているように実際には学生にはなれなかったと思われる。

3.2 剥製技術の習得と西海岸への移転

1924 年、朝枝はニューヨークにいた。4 月の渡米以来春夏にかけて YMCA で英語の習得に努めたが (Asaeda 1947)、9 月におきた日本の震災の影響でシカゴ大学への留学の夢は途絶えてしまった。その後、オハイオ州クリーブランドの喫茶店で働いたつきを得ていた (Asaeda 1947)。留学とは別の形で、異国の地における生活の足場を固める必要にせまられたわけである。しかし彼は幸いなことに、動物剥製の展示で一時代をなすジェイムズ・クラーク・スタジオ (James L. Clark Studios) にて仕事を得ることができた (Asaeda 1932; 1947)。ジェイムズ・クラークは、アメリカ・ロードアイランド生まれの大型動物のハンター、剥製師、彫刻家である。彼はカール・エイクリーのもと当時の革新的な剥製技術を習得している。エイクリー式の剥製は、フィールドでの調査を重視していた。野生動物の狩りにみずから出かけ、動物の皮、骨、角を採取するのみならず、それらを生きているかのような姿で展示する技法を編み出して、当時の自然史関係の博物館に多大なる影響を与えた (Lemmey 2013: 151; cf. Haraway 1984)。1926 年に師であるエイクリーの死後は、彼の後を受けてアメリカ自然史博物館において指導的役割を果たし、1930 年代には同博物館の展示を革新的に変化させたという (cf. Levinson and Uricheck 2005: 41)¹⁶⁾。

そうしたクラークが1910年にニューヨークのブロンクスで設立したスタジオに (Lemmey 2013: 151), 朝枝は属したわけである。いわばアメリカの自然展示の最先端に行くスタジオで、当時の博物館関係の技術をまじかに目にする機会に恵まれたことになる。そこには1929年まで所属していたという (Asaeda 1947; Takahashi 1943: 2)。

ただし朝枝はニューヨークにとどまっていたわけではない。1926年にはロサンゼルスに (Department of Justice Division of Records 1941–1942), 1927年春には、サンフランシスコにも一時的に居住していた。スタンフォード大学の総長でもあった魚類学者ディビッド・スター・ジョーダンと後のカリフォルニア科学アカデミーの館長となる魚類学者バートン・ウォーレン・エヴァーマンのために標本画を作成したのである (Asaeda 1947)。これらの成果は、カリフォルニア科学アカデミーにおける紀要 (Jordan, Evermann, and Tanaka 1927: plate 22–24) やカーネギー博物館の紀要にみつげだすことができる (Villadolid 1927: plate 35 figure 1)。それらの標本画から、彼の技術がすでに完成の域に達していたことが伺える¹⁷⁾。この仕事は一時的なものであったが、朝枝の生涯にとっては重要なエピソードであった。なぜならジョーダンとエヴァーマンという二人の高名な学者との知己を得たからである。両者との関係は後年朝枝がカリフォルニアをベースとして活動するきっかけとなったし、また後者を通じて生涯にわたって関わることになったカリフォルニア科学アカデミー (California Academy of Sciences) とも出会うことになった。

ところでその生涯において活躍や仕事ぶりがひろく社会的に認知されることの乏しかった朝枝であるが、この頃、珍しくスポットライトを浴びることになる。コダック社主催の写真コンテスト自然研究部門 (Nature Study Classification) で、第一等の賞が彼に授与されたのである。1929年7月28日に刊行されたニューヨーク・タイムズには、彼の授賞作である水辺に浮かぶ二羽の鳥の写真作品が掲載されている (写真1)。そこではニューヨーク在住のトシオ・アサエダと記載されている (New York Times 1929)。

この写真は、『ネイチャー・マガジン (Nature Magazine)』でもベスト写真の一枚として取り上げられている。同誌では、興味深いことに「漣のなかで (Amid the ripples)」というキャプションも付されている (Nature Magazine 1930: 106)。朝枝自身がつけたタイトルかもしれない。また『写真時代 (Photo-era magazine)』で



写真 1 コダック社で受賞した作品（国立民族学博物館朝枝利男コレクション X0081738）

も紹介されている。この記事から、写真大会がアマチュア写真家のコンテストであること、朝枝が賞金 500 ドルを手にしたこと、当時の彼がニューヨークの「417 West 145 Street」で生活していたことが確認できる（Photo-Era Magazine 1929: 168）。

これらの情報を総合すると、1920 年代後半の朝枝は、一時的な仕事で西海岸に足を運びつつも、アメリカのニューヨークを居住地としてクラーク・スタジオを媒介に写真家、画家としての仕事をこなしていた姿が浮かび上がってくる。博物学的な学問への関心をいだきつつ、写真や絵画といった技術に傾倒しながら、異国において自分の居場所を模索していたのであろう。

このコダック社での受賞を最後に、活動の拠点を西海岸に移したことは間違いない。朝枝がサンフランシスコに引っ越したのは 1929 年だからである（Takahashi 1943: 2）。1930 年に実施されたアメリカの国勢調査からも、サンフランシスコの在留邦人のもとに身を寄せる彼の姿がみえてくる¹⁸⁾。西海岸ではカラー写真に関する先進的スタジオであったナチュラルカラー・フォトプリント・スタジオ（Natural

Color Photoprint Studio) にて技師としての仕事を得ていた (Asaeda 1932, 1947; cf. Takahashi 1943: 2)。この写真スタジオに関する詳細は不明であるが、彼の写真とくにカラー写真への関心をここからもみてとれる¹⁹⁾。朝枝利男が人気作家ゼーン・グレイ (Zane Grey) 及びカリフォルニアの富豪で慈善家であったテンプレートン・クロッカー (Templeton Crocker) が主宰する探検隊に加わる直前のことであった。

4 博物学者になるために

4.1 最先端の博物学の技術を求めて

これまで朝枝利男の出生、進学、渡米、そしてアメリカでの活動までを述べてきた。以上から見えてくるのは、生来の自然への関心から地学・博物学に対する旺盛な知的好奇心をもった朝枝利男が、人生の運不運にまきこまれながらも、たくましく研鑽を続ける様である。

彼が自学自習を交えながら習得した技術は、当時の博物館に関わるものとしては最先端であったことがわかる。東京高等師範の教員で朝枝の師匠ともなった山内繁雄はシカゴ大学にも籍を置く一線の生物学者であり、同付属博物館は最新のジオラマ技術を用いた博物館が付設されていた。さらに渡米前からカメラ撮影とそれに色彩を付加する技術の研鑽を個人的に行っていたこともわかった。これらは彼がアメリカで探検隊に雇われたり、戦後博物館で技官として雇われることとなった直接の要因である博物学に関する基礎的技術の修練をすではじめていたことを意味している。

こうした下地のもと、本来の留学目的が頓挫したという偶然によるとはいえ、生活の便宜のためもありクラーク・スタジオにて職を得たのは僥倖であった。エイクリーというアメリカにおける自然史博物館展示を革新した他ならぬ人物によって牽引されていたスタジオにおいて最先端の技術を目の当たりにできたわけである。コダック社の写真展で入賞し、晩年まで身を助けた剥製作成の技術を自家薬籠中のものとしたのは、そこにおいてであった。

しかも朝枝は技術の更新を決して止めることはなかった。撮影技術の研鑽だけでなく、つねに最先端の技術に貪欲にアプローチしている。代表的な例としてカ

ラー撮影がある。サンフランシスコのカメラスタジオでは、この技術に磨きをかけようとしていた。探検隊に参加するにあたって提出した手紙のなかでカラー写真の撮影技術を最大限アピールしていることも (Asaeda 1932)、故なきことではないのである。

4.2 日米の研究者ネットワーク

もうひとつ本稿の分析から垣間見える点は、朝枝が入り込んでいた日本及びアメリカにおける在野から研究機関までを横断した研究者ネットワークの存在である。朝枝は生涯にわたり正規の研究者であったことはない。東京高等師範学校卒業以上の学位を得ていないし、より専門的な研究歴を積む機会は震災により失われたからである。その意味で彼は技術者かアマチュアの博物学者であったとすることが正しい位置づけであろう。一方で、彼は非常にユニークで優れた研究者ネットワークに属することができた幸運な人物でもあった。

海外留学の端緒ともなった山内繁雄との邂逅は、高等師範学校への入学前にさかのぼる。本稿で示したように山内のネットワークと関わりながらシカゴ大学まで進んだことが推測できる。朝枝自身がこの師について言及する文章は残されていないが、本稿でも引用した文章に見られる朝枝に対する山内の視線には心温まるものをみとることができよう。

山内自身の「趣味」に関する関心もあいまって、二人の関係は良好だったのではなかろうか。また山内自身、シカゴ大学への最初の日本人留学生ともいわれ (日米時報 1924: 20)、シカゴ大学のフレデリック・スタールから同大学のフラタニティ (Chihara and West 1998: 81) と、幅広い人脈を持った人物であった。たとえばスタールはシカゴ界隈の博物館勤務経験もあり、山内は生物学という隣接領域でひろく知られた人物であった。朝枝が渡米後すぐにクラーク・スタジオに場所を得られたのも、こうしたネットワークにいたためである可能性を推測させるに十分である。

朝枝は後にカリフォルニアに生活拠点を移し探検隊に参加することになるが、西海岸への移動のきっかけにも人脈が関係している。そもそもは、スタンフォード大学のジョーダンとカリフォルニア科学アカデミーのエヴァーマンという西海岸を拠点とする有力な研究者から、魚類の標本画を描く仕事を依頼されたからで

あった。依然として朝枝がニューヨークのクラーク・スタジオに在籍していた時期であることを考慮すると、博物館界隈のネットワークにいるなかで、日本の魚類にも関心を持っていた両氏の関心を朝枝が引いたと推測できる。彼の日本人という履歴と標本画の技術が、注目されたのである。

5 最後に

本稿では、朝枝利男の修業時代に焦点を当て、彼が日本とアメリカという2つの国でどのように自己形成を果たしていったのかを明らかにした。それは結果として博物学に関わる技術を修行する時代ともなっていた。朝枝自身が当初から計画や意図していた方向性と必ずしも同じでないという意味で運命の変転にさらされながらも、つねに最先端の技術を求めている朝枝の姿がみてとれた。学問的な世界で研鑽を積むことは断念せざるをえなかったが、すぐれた職人的技官として技術を更新していったといえよう。

そしてそうした朝枝の位置づけは、必ずしも彼個人だけのものではない。朝枝が身体化した博物学的技術は、科学的正確性を以って自然環境を再現しようとしながら、同時に一般の観客のために魅了するためのしかけが必要なものであった。いわば科学でありながらも自然を美しく描く芸術家的な技術が要される、美的に評価されうるものであった。彼の生物写真が写真大会で賞を得て、彼の魚類の水彩画がいまでも市場で取引されており、さらに収容所のそれはアメリカの博物館で高く評価されるゆえんである。いわば科学的表象と芸術的達成ともかわりあう領域において彼の業績は、位置付けられるわけである。世間に名前を知られることもない彼のような博物学的な技術に長けた裏方は、過去にも今でも数多く存在することであろう。本稿はそうした人物の活躍の一端を素描する試みである。

注

- 1) 伊藤秀三は、カリフォルニアで晩年の朝枝と面会している。当時の朝枝の肖像写真も残している。この邂逅については、伊藤のエッセイに記録されている（伊藤 2020: 4-5）。
- 2) ただし先に引用したように同書籍のなかで朝枝は、「浅枝利雄」と誤記されており、当時の日本での知名度のなさを逆説的にうかがわせる。
- 3) 朝枝の妻の名前の漢字表記については、カリフォルニア科学アカデミー所蔵資料「N19 521」における年賀状を参照。

- 4) たとえば、カリフォルニア科学アカデミーのデータベース (California Academy of Sciences 2019) やアメリカ自然史博物館 (American Museum of Natural History Research Library 2016) など参照のこと。
- 5) 当時の中里尋常高等小学校には、橋倉分教場と魚尾分教場があった (多野郡教育会 1910: 247-248)。朝枝が勤務したのが、いずれかは不明である。ただしこの箇所が依拠している資料の信頼性について、筆者は今の時点は若干の保留をつけてもいる。資料の性質に関する注 10 の検討も参照のこと。
- 6) 秋葉祐之は、日本人として最初にオリンピックに出場した金栗四三とともに、下関・東京間を走破したことで知られている (秋葉 1919: 34-39)。後に、『陸上競技会——計画と実際』(1924 年、目黒書店) という本を著している。狭い規矩にとらわれず、日本に限られない広い視野をもっているあたり、朝枝という人物には、当時のこうした明治の破天荒とも快男児的とも形容したくなる世代の活躍に相通ずるものがあっただろうと思われる。
- 7) 朝枝への影響関係は不明ながら、朝枝在籍時に東京高等師範学校教授として在席していた棚橋源太郎の名前は挙げておきたい。彼は 1909 年のドイツとアメリカへの視察からの帰国後、東京高等師範学校附属教育博物館にてジオラマ展示を試みていたという。この展示では、生活状況を示す狙いがあったととれ、具体的には背景画と剥製を組み合わせた展示がされていたという (金子 2001: 28-30, 32-33; 福田 2005: 42, 50)。時期的に朝枝はこの展示を熟覧可能である。渡米後ジオラマを製作するスタジオで働きはじめたこと、そして終生その技術で生計を立てていたことと無関係ではないかもしれない。
- 8) 麻布学園の記念誌では 1919 年から奉職している可能性も加味した曖昧な記述となっているが、東京高等師範学校の卒業年月から考えて 1920 年 4 月と推定される。なお別の記録でも 1920 年 4 月とある (Department of Justice Division of Records 1941-1942)。
- 9) カリフォルニア科学アカデミーの朝枝利男コレクション所蔵 Box #5 の N21.215 を参照のこと。
- 10) 同時期の 1920 年 4 月から 1921 年 3 月までは、自由学園、実践女子学園の教師を、1922 年 4 月から 7 月まで日本大学中等部の講師をあわせて勤めたとする記録もある (Department of Justice Division of Records 1941-1942)。ただし、この記録は日米戦を背景に日系人が捜査の対象となるなか、自宅に押し掛けてきた捜査官に対してスパイの容疑を晴らすためという緊迫した状況において朝枝に語られた内容に依拠している。捜査官は別の資料で裏取りをしているのか不明であり、資料自体の信憑性に留意して扱う必要があろう。朝枝自身が作成した履歴書には上記の情報が一切欠落しているのも気にかかる。以上を考慮して、たとえば本文における麻布学園からの退職年月は同記念誌の情報を採用している。同誌における就職年月と対照的に、退職年月は明記されていることも現実性が高いと思われる。また、自由学園の創設は 1921 年の 4 月であり、同学園に奉職していたとしても少なくとも上記の時期であるかは疑わしい。一方で卒業生によって作成された資料では、1921 年 4 月 15 日に開校された同学園における第一回入学式において、「地理の朝枝利男氏」をはじめとする何人かの教員が「旅行その他のお差支えのために出席なさることの出来なった」と言及されている (自由学園女子部卒業生会 1985: 37)。そのため一時的であれ、自由学園に在職していたことは間違いない。なお、アメリカ司法省の文書はカリフォルニア科学アカデミーのレベッカ・キム氏 (Rebekah Kim) にご教示いただいた。
- 11) 1921 年 1 月 5 日の日付のある伊豆諸島のスケッチが、朝枝の著作に含まれている (朝枝 1923: 234 と 235 の間の挟み込み)。なお麻布中学の教員時代ではないので本文では記載していないが、東京高等師範時代の 1918 年 11 月 12 日に太田金山よりの展望 (朝枝 1923: 396 と 397 の間の挟み込み)、退職後となる 1922 年 8 月 10 日には赤城山の最高峰となる黒檜山の頂上からの展望をスケッチしている (朝枝 1923: 374 と 375 の間の挟み込み)。後二者のスケッチにはいずれも浅間山が含まれており、「上州は太田の金山から望み見た浅間山、赤城山頂から見た浅間山…其の山容は、今だに自分の胸から去りやらぬ」(朝枝 1923: 412) という朝枝本人の記述と合致している。
- 12) 原音はスターに近いとされるが、ここでは慣例的な名前の表記に準じる。
- 13) 本稿の射程から外れるため割愛するが、山内はそれ以外にも帰一会という「欧米と東洋のさまざまな思想の間にある相違を率直に話し合い、世界の思潮の一致点を探り、同時にそうした活動を助成し、堅実な思想を作り一国の文明に資することを目標」とする組織に関わっていた (小林 2007: 308)。彼の我楽多宗における雅号の「帰一」という文言はここから由来

- しているであろう。彼のまた嘉納治五郎と交流があり（山内 1949）、柔道をアメリカに広げる際に富田常次郎、前田光世と同行していたとされる（篠原 2014）。先に引用した略伝によると皇室との関係や戦後マッカーサーに通訳を請われたエピソードなども紹介されており、話題に事欠かない人物である（Chihara and West 1998）。
- 14) “California, San Francisco Passenger Lists, 1893–1953,” database with images, FamilySearch (<https://familysearch.org/ark:/61903/1:1:KX4G-VHP:2 April 2015>), Toshio Asaeda, 1923; citing San Francisco, San Francisco, California, United States, NARA microfilm publication M1410 (Washington DC: National Archives and Records Administration n.d.); FHL microfilm 2,378,943.
 - 15) 現存が確認できる唯一の朝枝の著作である。それ以外にも、『徒歩者の爲めの地図の見方』『徒歩者の旅』『東京を中心とする徒歩者の旅程案』を刊行したと朝枝自身記しているが（朝枝 1923: 3）、本稿執筆の時点で国会図書館や各種の大学図書館及び古書店のサイトにおいてそれらの所在は確認できていない。
 - 16) Wikipedia の「James L. Clark」の項目（https://en.wikipedia.org/wiki/James_L._Clark）を参照。2017 年 9 月 17 日閲覧。
 - 17) これらの標本画の原画は、カリフォルニア科学アカデミーの朝枝利男コレクション # Box4 の A718-A726 に収蔵されている。
 - 18) “United States Census, 1930,” database with images, FamilySearch (<https://familysearch.org/ark:/61903/1:1:XCNM-K94: accessed 1 September 2017>), Toshio Asaeda in household of Youtaro Okano, San Francisco (Districts 251–409), San Francisco, California, United States; citing enumeration district (ED) ED 283, sheet 18B, line 97, family 24, NARA microfilm publication T626 (Washington DC: National Archives and Records Administration 2002), roll 205; FHL microfilm 2,339,940.
 - 19) この写真スタジオでは 2 名のドイツ人のもとで働いていたという（Takahashi 1943: 2）。またミソニアン協会のアメリカ芸術のアーカイブ（archives of american art）で検索すると、1931 年に撮影されたフリーダ・カーロとディエゴ・リベラの肖像写真と関係してこのスタジオの名前がでてくる。それによるとスタジオはサンフランシスコのサッター（Sutter）通り 555 番に所在していたという。ただしそれ以上の情報は見つからない。

参 照 文 献

〈日本語〉

秋葉祐之

1919 「破天荒壯舉下關東京間競走記」『野球界』9(12): 34–39。

朝枝利男

1923 『徒歩者の為めの趣味の登山』東京：東京啓発舎事務局。

1932a 「科学探検記——無人境ガラパゴス」『東京朝日新聞』8 月 11 日：8。

1932b 「科学探検記——無人境ガラパゴス」『東京朝日新聞』8 月 12 日：10。

1932c 「科学探検記——無人境ガラパゴス」『東京朝日新聞』8 月 13 日：10。

1933a 「無人島探検記」『新青年』14(7): 315–322。

1933b 「無人島探検記」『新青年』14(8): 316–322。

1933c 「無人島探検記」『新青年』14(9): 235–242。

1933d 「無人島探検記」『新青年』14(11): 316–322。

1935a 「南米西軍 学術探見隊（一）」『日米』1 月 12 日：2。

1935b 「南米西軍 学術探見隊（三）」『日米』1 月 13 日：2。

1935c 「南米西軍 学術探見隊（四）」『日米』1 月 15 日：2。

1935d 「南米西軍 学術探見隊（五）」『日米』1 月 16 日：2。

1935e 「南米西軍 学術探見隊（六）」『日米』1 月 17 日：2。

1935f 「南米西軍 学術探見隊（七）」『日米』1 月 18 日：2。

1936 「南太平洋上の秘境イースター島探見記」『科学画報』25(9): 49–53。

1937 「踊るアルバトロス」『科学画報』26(8): 28–31。

- 1938 「進化論を語るガラパゴスの鳥類」『植物及動物』6(1): 75-82。
朝日新聞
- 1990 「試写室」『朝日新聞』5月19日: 32。
麻布学園百年史編纂委員会編
- 1995 『麻布学園の一〇〇年 第一巻 歴史』東京: 学校法人麻布学園麻布中学校・麻布高等学校。
荒木高伸
- 1988 「ウミイグアナ」『朝日新聞』4月17日: 33, 35。
伊藤秀三
- 1983 『新版 ガラパゴス諸島——「進化論」のふるさと』東京: 中央公論社。
2020 「ガラパゴス研究史におけるクロッカー調査隊と朝枝利男」『月刊みんぱく』44(2): 4-5。
上田純雄
- 1970 『岩国人物誌』岩国: 岩国市立岩国図書館。
大蔵省印刷局編
- 1911 「學事」『官報』8439: 157-158。
大坪寿美子
- 2013 「日米優生学の接点——物学者山内繁雄を中心にして」山崎喜代子編『生命の倫理3——優生政策の系譜』pp. 131-160, 福岡: 九州大学出版会。
金子淳
- 2001 『博物館の政治学』東京: 青弓社。
川村伸秀
- 2013 『坪井正五郎——日本で最初の人類学者』東京: 弘文堂。
2017 『斎藤昌三——書痴の肖像』東京: 晶文社。
小林陽子
- 2007 「成瀬仁蔵の蔵書調査(第2報)——カタログ・シラバスなど資料の概要」『地域学論集』3(3): 297-313。
斎藤良輔編
- 1997 『郷土玩具辞典』東京: 東京堂出版。
篠原一雄
- 2014 「明治大学柔道部OBの 그레이シー ブラジリアン柔術観」
<http://kimuramasahiko.blog.fc2.com/?mode=m&no=1374> (2018年6月20日閲覧)
自由学園女子部卒業生会編
- 1985 『自由学園の歴史I——雑司ヶ谷時代』東京: 婦人之友社。
多野郡教育会編
- 1910 『多野郡誌』美九里: 多野郡教育会。
千原光雄
- 1999 「アメリカの学者達が選んだ今世紀を代表する藻学者山内繁雄博士」『藻類』47(1): 76-77。
東京朝日新聞
- 1923 広告7月3日: 1。
東京高等師範学校編
- 1916 『東京高等師範学校一覧——自大正五年四月至大正六年三月』東京高等師範学校。
1917 『東京高等師範学校一覧——自大正六年四月至大正七年三月』東京高等師範学校。
1921 『東京高等師範学校一覧——自大正十年四月至大正十一年三月』東京高等師範学校。
長岡規矩雄
- 1935 「現代名家蒐集番附」『キング』3月号: 145。
日外アソシエーツ編
- 2014 『事典 日本の科学者——科学技術を築いた5000人』板倉聖宣監修, 東京: 日外アソシエーツ。
日米
- 1923 「天洋丸の渡米者」『日米』3月13日: 5。

丹羽 探検家朝枝利男の修業時代

日米時報

1924 「世界の大市場シカゴ市と日本人」『日米時報』7月19日:20。

日布時事

1936 「南洋科学探検船ザカ號けさ入港——寫真班として乗組む唯一の邦人朝枝利男氏」『日布時事』8月31日:10。

丹羽典生

2020 「1930年代のアメリカにおける私的探検の考察——朝枝利男が参加した探検隊の旅程と経路の分析から」『国立民族学博物館研究報告』44(4):625–682。

平田勝政

2002 「大日本優生会の研究」『長崎大学教育学部紀要 教育科学』63:15–29。

福田珠己

2005 「ディオラマと地理的理想力」『大阪府立大学紀要 人文・社会科学』53:37–52。

宮下敦

2019 「第二次世界大戦前までの日本の教育用地形模型の歴史——西村健二の精密立体地形模型」『サステナビリティ教育研究』1:27–35。

山内繁雄

1923 「序」朝枝利男『徒歩者の為の趣味の登山』pp.1–5, 東京:東京啓発舎事務局。

1949 「嘉納先生の思い出」『柔道』20(10):2–5。

2007 「お札博士に就て」F. スタール/山口昌男監修『お札行脚』pp.322–327, 東京:国書刊行会。

山口昌男

1995 『「敗者」の精神史』東京:岩波書店。

2001 『内田魯庵山脈——「失われた日本人」発掘』東京:晶文社。

弥吉光長監修

1986 『図書月報 広告編』第21巻, 東京:ゆまに書房。

〈外国語〉

American Museum of Natural History Research Library

2016 Asaeda, Toshio, 1893–1968.

data.library.amnh.org/archives-authorities/id/amnhp_1000058 (2020年7月8日閲覧)

Asaeda, T.

1932 Letter to Templeton Crocker, on 25 January. Crocker-related material from the California Academy of Sciences, Crocker C. T. Oversize #27.

1947 Letter with CV to Dr. Robert C. Miller, on 17 December. Correspondences between Asaeda and the California Academy of Sciences from 1947 to 1949, in the archival collection of the California Academy of Sciences, CAS026.

California Academy of Sciences

2019 Toshio Asaeda Watercolor Drawings Collection.

<http://oac.cdlib.org/findaid/ark:/13030/c8xd17p8> (2020年7月8日閲覧)

Chihara, M. and J. A. West

1998 Shigeo Yamanouchi (1876–1973): A Noted Japanese Phycologist. *Phycological Research* 46: 81–84.

Department of Justice Division of Records

1941–1942 Toshio Asakda. Department of Justice Division of Records, NND978480.

Haraway, D.

1984 Teddy Bear Patriarchy: Taxidermy in the Garden of Eden, New York City, 1908–1936. *Social Text* 11: 20–64.

Howgego, R. J.

2006 *Encyclopedia of Exploration Part 3: 1850 to 1940: The Oceans, Islands and Polar Regions*. Potts Point, NSW: Hordern House.

Jordan, D. S., B. W. Evermann, and S. Tanaka

1927 Notes on New or Rare Fishes from Hawaii. *Proceedings of the California Academy of Sciences*,

- 4th series. 16(20): 649–680, plate 22–24.
- Levinson, Judith and Sari Urlicheck
2005 Documenting the Documenters: The Conservation Survey of the Akeley Hall of African Mammals. *Objects Specialty Group Postprints* 12: 39–61.
- Lemmy, K.
2013 James L. Clark. In T. Tolles and T. B. Smith (eds.) *The American West in Bronze, 1850–1925*, p. 151. New York: The Metropolitan Museum of Art, New Haven and London: Yale University Press.
- Nature Magazine
1930 The Nation's Best Photographs. *Nature Magazine*, February: 106.
- New York Times
1929 An Article about Kodak Competition. *New York Times*, July 28.
- Otsubo, S.
2005 Between Two Worlds: Yamanouchi Shigeo and Eugenics in Early Twentieth-Century Japan. *Annals of Science* 62(2): 205–231.
- Photo-Era Magazine
1929 About the Pictures on the Next Page. *Photo-Era Magazine* 63(3): 168.
- Takahashi, T.
1943 Personality Sketch: Toshio Asaeda. *Topaz Times*, August 5: 2.
- Villadolid, Deogracias V.
1927 The Rediscovery of *Inopsetta ischyra*, a Rare Species of Flounder. *Annals of the Carnegie Museum* 17: 395–397.